

## ②建設機械の稼働

### ア)予測の対象とした種

建設機械の稼働に伴い発生する騒音については、営巣・繁殖を確認した哺乳類及び鳥類については同一地点で数週間を過ごすことから、生息状況に変化があるものと考えられる。調査範囲内において繁殖を確認した哺乳類及び鳥類はヤエヤマコキクガシラコウモリ、カグラコウモリ、リュウキュウユビナガコウモリ、ズグロミゾゴイ、リュウキュウツミ、カンムリワシ、キンバト、シロチドリ、コアジサシ、エリグロアジサシの10種である。なお、小型コウモリ類3種及びカンムリワシについては「6.12 生態系」で扱うため、ここではズグロミゾゴイ、リュウキュウツミ、キンバト、シロチドリ、コアジサシ、エリグロアジサシの6種について検討を行った。

### イ)予測の結果

ズグロミゾゴイは水岳、カタフタ山、タキ山などの改変区域外及びゴルフ場内二次林などの改変区域内において営巣を確認した。リュウキュウツミ、キンバトについては水岳、カタフタ山、タキ山などの改変区域外のみ、シロチドリ、コアジサシ、エリグロアジサシについては海岸や岩礁などの改変区域外のみで営巣を確認した。

それぞれの種の営巣箇所にもっとも近い建設機械の稼働位置や工事段階毎の稼働台数などを考慮し建設機械の稼働に伴い発生する騒音の予測結果を表-6.9.2(6)に示す。ここで、人工的な騒音が野生生物に与える影響として、行動の変化(短期的な行動変化、行動圏の変更、誤認による間違っただ行動)、利用する音のマスクング、聴覚障害、生理的变化などがあげられるが、特に問題となるのはこれらの変化が個体維持や種族維持に影響を及ぼす場合である。これらの影響の程度については種による差及び個体差はあるものの、アジサシの例などを参考にすると、それぞれの個体に届く音圧が、(情報が無い場合安全側に考えて)60dBを超えた場合には注意した方が無難であることが示唆されている<sup>#1</sup>ことから、60dBを注意をする目安としてとらえることとし、図-6.9.2(31)に陸域、図-6.9.2(32)に海域の営巣地点を示し、60dBを超過する地点について示す。

改変区域外の営巣箇所は、どの種についても建設機械の最大稼働時である3年7月次において最大となった。また、改変区域内のズグロミゾゴイの営巣箇所は、2年次の改変区域内の営巣箇所(No.15)については直近での稼働時が最大となり、3年次の改変区域内の営巣箇所(No.9~14)でも直近での稼働時が最大となった。

リュウキュウツミについては、8箇所中7箇所について60.4~64.3dBとなっているが、タキ山東やキツヌングスクの残丘の樹林地が遮る形となるため、一定の減衰効果が見込まれ、また、周辺に水岳、カタフタ山などのまとまった樹林地が残存しており、利用可能な環境は残されることから、重要な種の生息状況の変化は極めて小さいものと考えられる。

キンバト、シロチドリ、コアジサシについては全ての営巣箇所でも60dB以下となり、重要な種の生息状況の変化はないものと考えられる。